

【原 著】

ドイツ付近の春・5月の気候と歌：  
異質な他者の発見を促す ESD 教師教育の学際的アプローチ

加藤 内藏進 長岡 功 加藤 晴子 大谷 和男

Climate and songs of spring/May around Germany: An interdisciplinary approach on  
ESD teacher education leading to the understanding of heterogeneous others

KATO Kuranoshin, NAGAOKA Isao, KATO Haruko, OTANI Kazuo

2023

岡山大学教師教育開発センター紀要 第13号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.13, March 2023

## ドイツ付近の春・5月の気候と歌：

## 異質な他者の発見を促す ESD 教師教育の学際的アプローチ

加藤 内蔵進※1 長岡 功※1 加藤 晴子※2 大谷 和男※3

ドイツ付近の「春・5月」の気候と歌の表現に関する学際的テーマを例に、5月の位置づけに関する新たな気候学的解析と再体系化を行うとともに、「異質な他者」への出会いを促す大学での授業構築へ向けた検討を行った。授業は、教育学部の「教科横断的思考・表現法」に関する専門科目での実践を念頭に置いた。「夏の入り口としての春」というドイツ付近の季節感に関連して、5月には「極端な低温日」の頻出する冬は終了しており、ドイツの「夏」に普通に出現する平均気温 15～20℃の日の頻度も急増する。このような気候の背景も踏まえて、ドイツ歌曲に見られる「春・5月」の表現について、教材化の観点から分析・考察した。更に、ドイツと日本の歌曲について、季節の共通事象に注目して表現や気候背景の捉え方を吟味し、異質な他者への出会いを促す授業構築のための検討・提案を行った。

キーワード：気候と音楽、ドイツ付近の春・5月の気候と季節感、ESD 教師教育、異質な他者への理解

※1 岡山大学学術研究院教育学域

※2 元 岐阜聖徳学園大学教育学部

※3 テレビせとうち(株)

## I はじめに

季節サイクルも含めた気候環境は、文化生成の重要な背景の一つである。しかも、明瞭な四季を持つとされている中緯度地域の中でも、アジアモンスーンの影響が大きい東アジアとユーラシア大陸西岸に位置するヨーロッパの比較で例示されるように、気候や季節サイクルの地域的多様性は大きい。従って、例えば、日本に住む人々がヨーロッパの気候や文化の日本との違いを学際的に把握することは、「自分たちの当たり前」とは違う自然環境、文化、価値観等を持つ「異質な他者」への思いを馳せる、重要な機会の一つになり得ると考える。

ところで、持続可能な社会づくりのための人材育成へ向けた教育である ESD (Education for Sustainable Development) において、種々の取り組みを個別に行うだけでなく、「種々の葛藤や複雑な絡み合い、繋がり等を正視して解決策を模索する視点」(いわば「ESD 的視点」)の育成も不可欠である(日本ユネスコ国内委員会 2021 ; UNESCO 2017)。その際には、「異質な他者」を尊重する

視点も大変重要である（小林 2016；中澤・田淵 2014）。また、将来の教員に対して、気候変動教育のベースの一つである気候環境やその変動自体への科学的リテラシーの育成も重要と考えるので、気候を接点とした学際的な内容自体の学習を行いながら「ESD 的視点」を育成する授業の開発は有意義と考える。更に、種々の地域の気候や歌などとの関わりに注目した学習活動、例えば、「同じ名称の季節であっても、気候・季節感やそれに関連した人々の感情が、地域によって如何に違うかを発見する」学習は、異なる文化、価値観、季節感等をもつ人々、いわば「異質な他者」を明瞭に認識する機会となり得よう。

本グループは、日本やドイツ、北欧を例に、気候と音楽の関わりに関する知見の学際的体系化とそれらに基づく学際的な気候・文化理解教育の指導法開発を行ってきた（加藤・加藤 2005, 2006, 2011, 2014, 2019；加藤他 2009, 2011, 2014, 2017a, b, 2019a, b；濱木他 2018 等）。これらの取り組みにおいて、日本列島付近に関しては、梅雨や秋雨を含めた「六季」やそれらの「中間的な季節」が約 1 ヶ月単位で大きく遷移するような季節サイクルと季節感で特徴づけられることに注目した。単に春夏秋冬という季節の括りの意識では見逃してしまう興味深い点への意識を喚起するためである。例えば、初冬の「時雨」、冬を挟む「初冬」と「早春」の非対称的な季節進行、4 月初め頃の日本列島スケールでの季節な急昇温などである。

一方、ドイツ付近に関しては、「春」（特に「5 月」）になった特別な喜びが、多くの作品に表現されている。そこで、本グループでは、単に季節平均だけでなく日々の気温の変動性にも注目して、伝統的な冬の追い出しの行事「ファスナハト」に象徴される「何としても追い出したい冬の厳しさ」の特徴と 5 月、及び、「日々の変動に伴い冷涼な日々も時々現れる夏」と「過ぎ去る美しく儂い瞬間としての 5 月」という季節進行に注目した。また、加藤（2023）は、気候と文化の学際的理解を通じた ESD 授業開発も、教育学研究科の修士課程における PBL（Project Based Learning）の興味深い取り組みの一つになりうると提案し、例えば、「ドイツの夏」と「日本の夏」の気候と季節感の比較に焦点を当てることで、「異質な他者」との出会いに繋げる取り組みの可能性も例示した。

以上の取り組みを通して、ドイツ付近での「春・5 月」に関連する気候学的位置づけの理解自体もかなり進んできた。従って、ドイツ付近の気候と「春・5 月」に関連した歌の表現とを同時に捉えることにより、「異質な他者」の理解を促す授業構築への更なる検討を行う機が熟しつつあると考えた。

ところで、岡山大学教育学部では、「大学が独自に設定する科目」の「教科横断的思考・表現法」に該当する専門科目の一つとして、「くらしと環境 A, B」を夏季集中で毎年開講している（加藤内藏進が主担当）。これらは教務上 2 つの科目であるが、計 4 日間でひと繋がりの内容として、第 1～3 日目に日本やドイツ・北欧などの気候と季節サイクルについて講義し、それを踏まえて第 4 日目に美術・音楽との連携による鑑賞や創作活動を行なっている（2020 年度を例とする全体の授業の流れに関しては、加藤・加藤（2021）を参照）。また、2022 年度には、第 3 日目のドイツ付近の気候と音楽・伝統行事での季節感の表現に関

して、歌曲の鑑賞と解説も充実させるために長岡もゲストとして参加した（加藤内蔵進は2022年3月に定年退職したが、特命教授（教育）として主担当）。

そこで本稿では、まず、ドイツの「春・5月」の気候学的位置づけについて、加藤他（2017b）、加藤・加藤（2019）、加藤他（2019b）、加藤（2023）等をベースに、教材開発の視点での新たな解析結果も加えて再体系化する。次に、ドイツ歌曲に見られる「春・5月」の到来の喜びに関する表現について、2022年度の「くらしと環境」で取り上げた曲を例に、異質な他者への出会いを促す教材化の観点から分析・考察する。更に、共通した季節の事象に注目して歌に表現された季節感と気候を比較する視点から、ドイツと日本の歌曲を例に、その事象に関する表現や気候学的位置づけの違いを吟味し、音楽の内容にも踏み込みながら異質な他者への出会いを促す授業の構想へ向けた検討を行う。なお、上記の構想に基づく授業の実践と分析は、今後の研究課題としたい。

## II 「くらしと環境」での関連部分全体の授業の流れ（2022年度を例に）

2022年度には、第3日目の3・4限目、及び、6・7限目に、ドイツの気候と音楽・伝統行事にみられる季節感に関連して、「春・5月」を視点の中心に据えて講義を行った（1時限は45分。なお、都合により、ゲスト授業者による別のテーマの講義を第5限目に挟んで実施した）。その概要を第1表に示す。

第1表 ドイツの「春・5月」を中心に据えた授業の概要（第3日目）

時限	内容
3・4	加藤他（2017b）と同様に、冬との決別や春の到来を歌ったドイツの子供の歌を鑑賞するとともに、冬の追い出しの行事「ファスナハト」（Fasnacht）（武田1980, 等）の映像例の視聴も行い、ドイツ付近の「何としても追い出したい厳しい冬」に関する季節感の大枠を日本列島付近と比較。更に、「厳しい冬」という季節感に通じるドイツ付近の気候と「春・5月」の位置づけ、及び、関連する大気場の特徴を講義。
6・7	ドイツ付近の「春・5月」の喜びを歌った詩や歌曲に表現された季節感（作品の鑑賞や長岡による解説も含む）、及び、夏への経過の中で見た「春・5月」の気候と季節感の講義（映画『会議は踊る』の中の《ただ一度だけ》の歌の場面の視聴等も含む）。

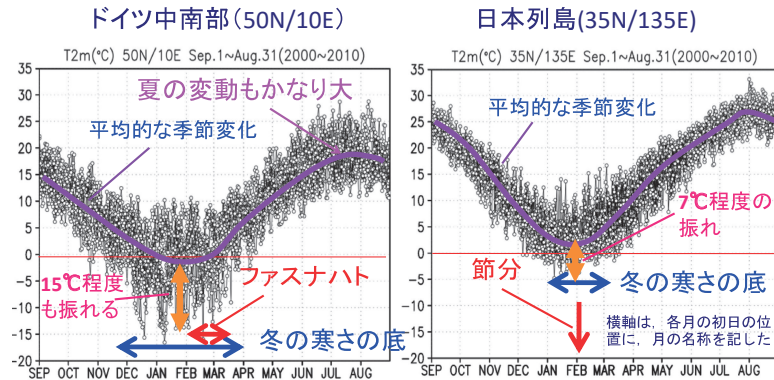
ドイツ付近の季節サイクルと気候に関しては、主に、加藤他（2017b）、濱木他（2018）、加藤・加藤（2019）、加藤他（2019b）、加藤（2023）等を踏まえて解説した。また、ドイツ付近の「春・5月」が歌われた詩や芸術歌曲の例として、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の詩《5月の歌》（Mailied）、シューマン（Robert Alexander Schumann, 1810-1856）の歌曲集《詩人の恋》（Dichterliebe）Op. 48-1 第1曲〈美しい5月に〉（Im wunderschönen Monat Mai）（詩：ハイネ, Heinrich Heine）、メンデルスゾーン（Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy, 1809-1847）の歌曲《もう一つの五月の歌（魔女の歌）》（Andres Maienlied [Hexenlied]）Op. 8-No. 8（詩：ヘルティ, Ludwig Heinrich Christoph Hölty）、シューベルト（Franz Peter Schubert）の歌曲集《冬の旅》

(Winterreise) D911 第 11 曲〈春の夢〉(Frühlingstraum) (詩：ミューラー，Johann Ludwig Wilhelm Müller)，シューベルトの歌曲集《美しき水車屋の娘》(Die schöne Müllerin) D795 第 18 曲〈萎める花〉(Trockne Blumen) (詩：ミューラー)を取り上げ、鑑賞や解説を行った(〈春の夢〉の鑑賞は授業では割愛)。

なお、以下の作品名や作者名等に関しては、和文のみで簡略化して表記する。

### Ⅲ ドイツ付近の冬から夏への季節進行の中でみた春・5月

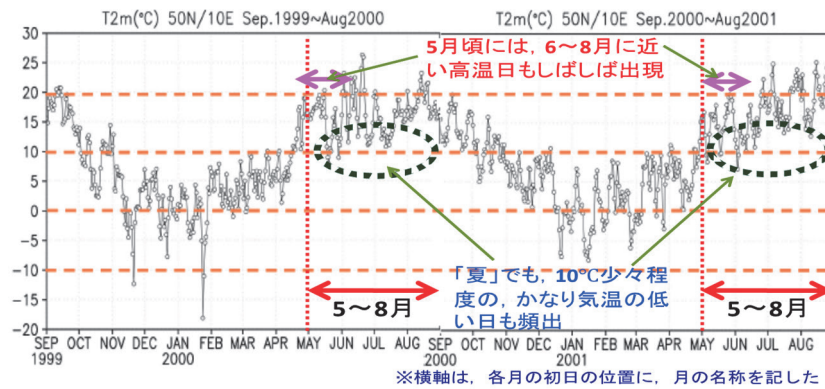
本章では、「春・5月」の季節感に関連したドイツ付近の気候について簡単に紹介するとともに、季節進行の中での「春・5月」の位置づけを、学生が発見的に把握出来る教材の素材の提供を意識した、新たな解析結果も示す。なお、授業では関連する大気場についても紹介したが、本稿では割愛する。また、「過ぎ去る美しく儂い瞬間としての5月」に関する議論は本稿では割愛する。



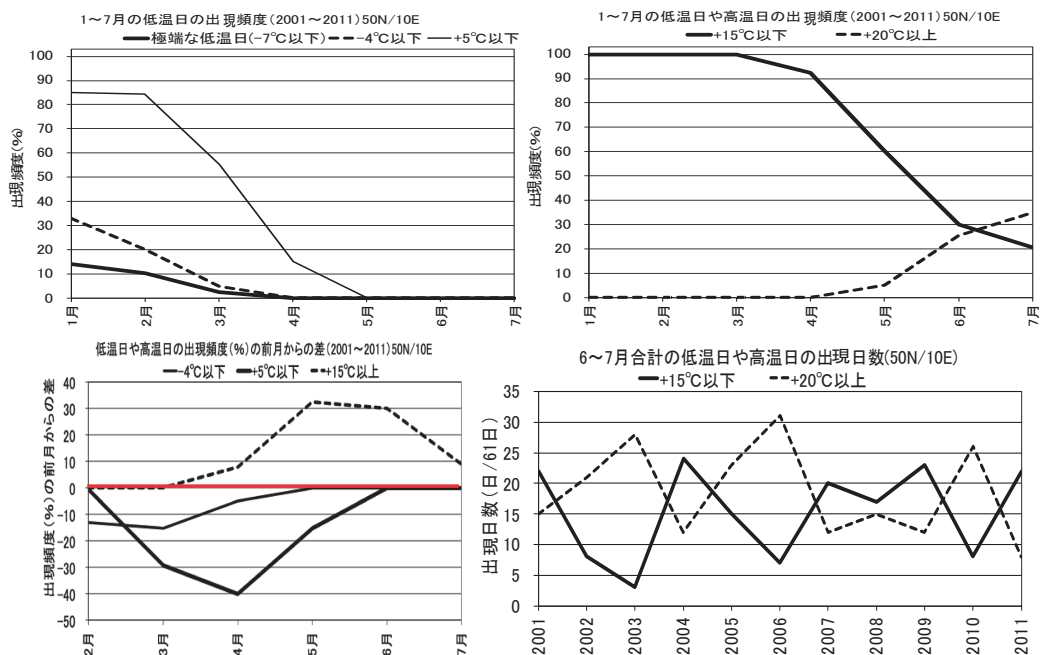
第 1 図 ドイツ中南部の 50° N/10° E (左図) と日本列島付近の 35° N/135° E (右図) における日平均地上気温(°C)の時系列を、2000/2001～2010/2011 年冬について、それぞれ重ねたもの。NCEP/NCAR 再解析データに基づく。加藤他 (2017b) を改変。

ドイツ中南部の 50° N/ 10° E と日本列島付近の (兵庫県中部付近を例示) 35° N/ 135° E における日平均気温の時系列を、それぞれ 11 年分重ねて第 1 図に示す (加藤他 (2017b) を改変)。11 年分の時系列が重なる温度範囲の中央付近を季節の進行に沿ってなぞったものが、平均的な気温の季節変化に対応する (図に書き込み済み)。また、その線からどの程度気温の低い日が出現しうるかにも注目出来る。日本列島付近の冬には、日平均気温が季節平均よりも 7°C 程度以上低い日は現れない。しかし、ドイツ付近では、単に平均気温が九州～関東よりも 5°C 程度低いだけでなく、ドイツの冬の平均気温より更に 7°C 程度以上低い日 (日平均気温 -7°C～-15°C 程度の「極端な低温日」) がしばしば出現する点も注目される。

一方、第 2 図の 1999 年 9 月～2001 年 8 月におけるドイツ中南部の日平均地上気温の時系列例に示されるように、4 月頃にはそのような極端な低温日もやっと現れなくなる。5 月頃には、まだ平均気温は上昇中の時期ではあるが、「真夏」に近い高温日も時々は現れるようになる (加藤・加藤 (2019), 加藤 (2023) 等も参照)。



第2図 ドイツ中南部 (50° N/10° E) での日平均地上気温 (°C) の時系列。NCEP/NCAR 再解析データに基づく。加藤・加藤 (2019) を改変。



第3図 ドイツ中南部 (50° N/ 10° E) における凡例に示すカテゴリー毎の日平均気温の出現頻度の季節進行 (%) を上段に、各カテゴリーにおける出現頻度 (%) の前月からの差 (正值が増加) を下段の左図に、また、6・7月全体で合計したカテゴリー毎の日数の年々の変動を下段の右図に示す。2001~2011年のNCEP/NCAR再解析データに基づき解析。

以上の点を端的に把握するための情報集約も含めた教材提供も意識して、ドイツ中南部の 50° N/10° E における日平均気温のカテゴリー別出現頻度の季節経過、及び、6・7月における日平均気温 15°C以下や 20°C以上の日数の年々変動の解析も行なった。その結果を第3図に示す。

「極端な低温日」(日平均気温-7°C以下)や、それに準じる「日平均気温-4°C以下の日」の出現頻度は、3月になるとかなり減少し、4月には九州~関東の低地での真冬の寒さに対応する+5°C以下の日数もかなり少なくなる(3月よりも、頻度が大きく減少)。一方、日平均気温 15°C以下の日が殆どであった4月に比

べて、5月にはその頻度が約50%に減少する。言い換えれば、日平均気温15℃以上の日の出現頻度は4月から5月にかけて急速に高まり、5月には50%程度に達することになる。

ところで、6・7月には、日平均気温20℃以上の日の頻度が高まるが、それでも約30%しかなく（下段の右図）、日平均気温15～20℃の日の頻度が約45%も占める。また、6・7月でも日平均気温15℃以下の日が20日以上出現する年は（約1/3以上の頻度）、11年間で5回もある。九州～関東の低地では、5月終わり頃に日平均気温が約20℃になり、盛夏期には27～28℃に達する。しかし、ドイツ付近での日平均気温10～15℃程度の日の出現頻度は、年々や日々の変動の一環として、「夏」でも決して低くない点が注目される（第2図も併せて参照）。

従って、「夏の入り口としての春」というドイツ付近の「春・5月」の季節感には、「平均気温こそ6月以降より数℃低いものの、6・7月の約45%を占める日平均気温15～20℃の日（いわばドイツの「夏」に準じる日）の出現頻度が、4月に比べて急増する」という意味で、不自然でないことが分かる。また、上記の結果に基づく「異質な他者」との出会いへ向けた教材化の際に、日本列島付近の「夏」とドイツ付近の「夏」が如何に違うかの把握の上で、更に、その「夏」への進行と繋ぐ必要がある。

以上のような結果は、季節サイクルの気候学的な「平均状態」を把握する際に、平均値や標準偏差等だけでなく、例えば複数の閾値を用いた日々の現象の頻度など、現象に即した集計の工夫を行うことによって、（特に教材・内容開発の視点として）、コンパクトに本質に迫る素材の提供の可能性を例示している。

#### IV ドイツ歌曲にみる「春・5月」の喜びの表現例

本章では、ドイツ付近における「春・5月」の季節感の中で、その喜びが歌われた4つのドイツ歌曲の表現の特徴を分析し、「異質な他者」との出会いを意識して授業で紹介する際の留意点も指摘したい。なお、「春・5月」の喜びという一般的な季節感の中だからこそ、悲しみ、絶望が際立つ2曲も取り上げた。

##### 1 シューマン《詩人の恋》第1曲〈美しい5月に〉（詩：ハイネ）

「とっても美しい5月に、蕾という蕾が吹き出した時、まさにその時、私の心にその恋が芽生えたのだ。」（1番の歌詞。筆者訳）という内容である。この曲では、5月の情景を歌う前楽節（第5～8小節）のcis→h→aと3度下行を反復する音形が、恋の芽生えを歌う後楽節（第9～12小節）で、h→cis→d、d→e→fisと3度上行に転じ上昇する（譜例1）。また前奏と後奏では、主調である嬰へ短調の主和音の使用と主和音への解決を避け、歌唱部においてもイ長調→ロ短調→ニ長調という転調により主調を徹底的に回避する（第2表）。ドイツ人が「wundershön」と形容する5月の美しい情景が下行する音形と「長調」という調性によって、また、恋が芽生えた瞬間の浮ついた夢遊するような感情が、上行する音形と「転調」によって表出される。そして、主和音の使用や解決を回避した前奏、間奏、後奏は、「何かが起こりそう」、「まだ続きがありそう」、

「終わりを期待させたのに、終わらない」という雰囲気醸し出す。このような「恍惚とした喜び、モワモワとして宙ぶらりんの状態に置かれている雰囲気」が音楽的にも効果的に表現されているのを感じることで、「春・5月」の季節感の日本との大きな違いを学生が意識する契機になろう。

譜例 1



第2表 《美しい5月に》における和声。なお、本文では日本語のみで調性を表示した。

小節	歌詞等	和声進行
(1~4)	前奏	fis : IV <sup>1</sup> → V <sub>7</sub> × 2
(5~6)	Im wunderschönen Monat Mai, (ととても美しい五月に)	A : II <sup>1</sup> (=fis:VI <sup>1</sup> ) → V <sub>7</sub> → I
(7~8)	Als alle Knospen sprangen, (蕾という蕾が吹き出したとき)	A : II <sup>1</sup> → V <sub>7</sub> → I
(9~10)	Da ist in meinem Herzen (まさにその時、私の心に)	h : IV <sup>1</sup> (=A: -V) → V <sub>7</sub> → I (=D:VI)
(11~12)	Die Liebe aufgegangen. (その恋が芽生えたのだ)	D : ○IV → V <sub>7</sub> → I
(23~26)	後奏	fis : IV <sup>1</sup> → V <sub>7</sub> × 2

2 メンデルスゾーン 《もう一つの五月の歌 (魔女の歌)》(詩：ヘルティ)

譜例 2



譜例 3



曲は、ト短調 8 分の 6 拍子、Allegro vivace の速いテンポで、第 1・2 フレーズの原詩のイントネーションに基づく動機の反復や圧縮による律動、g→f 音へと上昇する旋律(譜例 2)や、第 3 フレーズ「ブロッケン山へ」と歌われる旋律内の上行半音階進行(譜例 3)は、ゲーテのファウストで描かれる「ヴァルプルギスの夜」(Walpurgisnacht) に向かう魔女たちの高揚感や不気味さを表出する。また、V-2 で例示するような伴奏部の目まぐるしく動く 16 分音符の分散和音やフィギュアは、箒に乗って空を自在に飛びかう魔女たちの姿を連想させる。魔女や魑魅魍魎(ちみもうりょう)なものにとっても五月は特別な季節



であることを感じさせるこの曲は、老ゲーテにその才能を愛されたメンデルスゾーン 18 歳の頃の才気溢れた作品である。授業では、人間だけでなく魔女までも、「春・5月」の到来に浮き浮きする点を強調すると面白いであろう。

3 シューベルト《冬の旅》第 11 曲〈春の夢〉(詩：ミュラー)

連作歌曲集《冬の旅》の第 11 曲で、失恋した若者が冬の厳しいさすらいの旅路の中で歌う曲である。詩の冒頭「五月に咲き満ちるような色とりどりの花の夢を見た」は、若者の失恋前の至福な時間の回想であり、そのイ長調の旋律と素朴な和声によって、全 24 曲中 16 曲が短調で書かれた暗い色調の中で、あまりにも美しい瞬間として描かれる(譜例 4)。しかし、雄鶏が啼いて目が覚めると冷たい冬の現実に戻されてしまう。その大きなギャップを学生が感じることで、ドイツの冬と春の気候のギャップにも意識を向ける契機になり得よう。

譜例 4

4 シューベルト《美しき水車屋の娘》第 18 曲〈萎める花〉(詩：ミュラー)

譜例 5

譜例 6

譜例 7

連作歌曲集《美しき水車屋の娘》は、水車職人としての修業の旅に出た若者が、とある水車小屋の美しい娘に恋をするが、彼女の気持ちが狩人に向いていくことで、焦燥と絶望から最後は小川へ身を投じるというストーリーを持つ。「萎める花」は、死を決意した若者が、自分の真実の愛を彼女が悟った時、自分と共に墓に葬られた花までもが咲き出で、厳しい冬が春に転ずるが如く自分の人生も報われるであろうと歌われる曲である。

曲はホ短調で、A-A-B の 3 部構成となっている。自らを嘆く場面である A-A の部分では、伴奏は一貫して淡々と和音でリズムを刻んでいくが(譜例 5)、「自分の真実の愛を彼女が悟った時には」と若者が想像する場面である B(詩の 7・8 連目)に入ると、伴奏はホ長調に転じ左手にオスティナートが現れる(譜例 6)。更に 8 連目が反復される際、伴奏のオスティナートは力強いダクテュルス・リズムに転じ、「全ての花が咲き 5 月(=至福の瞬間)がやって来る」と高らかに歌われる(譜例 7)。従ってこの曲も、「若者の気持ち」が、『春・5 月』という言葉の重みに絡まって、「如何に深く表現されているか」を学生が感じ取れる格好の教材になり得よう。但し、以上の 4 つの曲で例示したような、異質な他者への出会いにも繋げうる種々の表現のポイントを、音楽を専門としない学生も深く味わえるよう支援する方法に関しては、今後の更なる検討が必要と考える。

## V ESD 的視点に立った授業実践構想

### 1 授業構想のコンセプト

大学生(主に小中学校や高等学校の教員免許取得希望者)を対象とした、音楽を通して ESD 的視点の育成を図る学習プログラムの構想を述べる。なお、本章で構想する授業は、「くらしと環境」の第 3 日目に行なったような学習全体(第 1 表)の更なる深化の位置づけでも、単独の授業としても、気候で扱う内容のどこに焦点をあてるかを調整することで実施可能である。

〈授業名〉音楽作品を通して深める気候や生活文化の理解

〈設定の理由、趣旨〉

音楽文化は、各々の地域で長い時を経て育まれてきたものである。その表現には多かれ少なかれ、当該地域の伝統的な文化、風土、生活習慣や風習、風土が関わっており、人々の物事に対する感じ方や価値観も反映されている。そのバックグラウンドとなる要素の一つに気候や季節感がある。

例えば、一言で春といっても、その様相は地域により多種多様であり、人々の春に対する感じ方や捉え方、見方にも大きな違いがみられる。したがって、「春に花が咲く」という現象を見るとき、それが単に、いつ、どんな花が開くのかという事実、実態を知るにとどまらず、花が咲くという事象が当該地域の人々にとって何を意味するのかという点にまで目を向けると、当該地域の人々の春に対する思いや季節感に出会うことができる。これは、異なる地域、異なる文化に暮らす人々の思いを感じるきっかけに繋がるであろう。

人々の思いが表われているものの一つに季節を歌った歌があり、春を題材としたものが非常に多い(加藤・加藤 2014)。歌の表現では歌詞のウエートが非常に大きいことから、同じ題材が歌われているものや登場するものを取り上げ、その表現を比較することを通して、歌の背景にある季節感や伝統的な文化、風習、その違いに目を向けることができる。そこから異なる地域、異質の他者に対する理解に向けた ESD 的視点の育成が可能となりうる。

そこで、ドイツと日本の歌曲の中から、歌詞に共通した春の事象がみられる作品を授業の素材として取り上げ、それが〈どのように歌われているのか〉を

起点とした授業構想を提示する。ドイツ歌曲では、メンデルスゾーン作曲の《もう一つの五月の歌（魔女の歌）》（詩：ヘルティ）、日本歌曲では、山田耕筰作曲の《燕》（詩：三木露風）を取り上げる。双方に共通して春の到来の使者〈燕〉が登場する。以下、加藤・加藤（2019）の解説も踏まえ、授業構想を検討する。

## 2 素材について

（1）ドイツ歌曲：メンデルスゾーン《もう一つの五月の歌（魔女の歌）》（詩：ヘルティ）

（歌詞は全3番のうち、1番の前半を掲載。筆者による和訳も示す。行末の押韻にも注目）

<b>Die Schwalbe fliegt,</b>	つばめは飛び、
<b>der Frühling siegt</b>	春は勝ち誇って
<b>und spendet uns Blumen zum Kranze;</b>	私たちに王冠のための花々と与えてくれる。
<b>bald huschen wir</b>	まもなく私たちは
<b>leis aus der Tür</b>	音を忍ばせ急いで戸から飛び出し、
<b>und fliegen zum prächtigen Tanze.</b>	華やいだ舞踏会へ飛んで行く。

譜例 8 《もう一つの五月の歌（魔女の歌）》 bar. 1-15

詩：Ludwig Heinrich Christoph Hölty / 曲：Jakob Ludwig Felix Mendelssohn

**Allegro vivace**

1. Die Schwal - be fliegt, der Früh - ling siegt und spen - det uns Blu - men zum  
(2. Um) Beel - ze - bub, tanzt un - ser Trupp und küßt ihm die kral - li - gen

Kran - ze; bald hu - schen wir leis aus der Tür und flie - gen zum präch - ti - gen  
Hän - del! ein Gei - ster - schwarm faßt uns beim Arm und schwin - get im Tan - zen die

### 〈背景と詩の内容〉

ドイツでは、4月30日日没から5月1日未明にかけての夜はヴァルプスギスナハトまたはヘクセンナハトと呼ばれ、この夜に魔女たちがブロッケン山で饗宴を催し、ついにやって来た春を祝うと伝えられている。詩のテーマは、春が

来てブロッケン山に舞踏会に行く日を心待ちにしている魔女たちである。

IV-2で述べたように、曲は8分の6拍子、Allegro vivace。スピード感、躍動感をもって、魔女たちの浮き浮きした様子が描写的に表現されている。ピアノ伴奏の16分音符の連続による流れは、飛び交う燕を思わせると同時に、箒に乗って空を自在に飛び交う魔女たちの姿をも連想させる。

(2) 日本歌曲：山田耕筰《燕》(詩：三木露風)

(歌詞は1番を掲載)

皐月の浪を越えわたり  
野をこそ慕へ、つばくらめ  
野をこそ慕へ、つばくらめ  
求めあぐみたる古巢ゆゑ

譜例9 《燕》 bar. 1-16

三木露風 詩 / 山田耕筰 曲

**Allegretto grazioso** ♩=80

The musical score consists of four systems. The first system shows the piano introduction with a melody in the right hand and a bass line of 16th notes in the left hand. The second system continues the piano introduction. The third system begins the vocal entry with the lyrics 'さつきのなみを、こえわたり、'. The fourth system continues the vocal line with the lyrics 'のをこそしたへつばくらめ、'. Dynamics include *mf*, *f*, and *dim.* throughout the piece.

### 〈背景と詩の内容〉

詩には、春の季語である燕を介して美しい五月の自然が賛美されている。畑中良輔・塚田佳男・黒沢弘光は本詩について次のように解説している（1998 p. 27）。「軒下に巣を作り，そこにかわいい雛鳥がひしめいたりする姿が目立つのは，梅雨も近くなるころである。《燕》の詩は，懐かしい古巣の野をめざして，ひたすら飛び急ぐ燕の姿を，愛おしみをもって描いている。五月の輝く日ざしを受けて，青い浪の上を越えて，燕が飛んで行く。そしてとうとうめざす古巣の野を見つけ，慕いに慕ってついに巡り逢った。」

曲は8分の3拍子，Allegro grazioso。軽やかでかつ躍動感のある表現になっている。ピアノ伴奏では，左手パートと右手パートが，各々三連符で始まる短いモチーフを掛け合うように畳みかける形で進行していく。

### （3）比較の観点

二つの曲には共に〈五月〉〈燕〉が登場し，ピアノ伴奏には燕の飛び交う様子を思わせる描写的な表現がみられ，共にスピード感，躍動感に満ちた表現になっている。しかし，表現されている題材，内容は大きく異なる。メンデルスゾーン《もう一つの五月の歌（魔女の歌）》では，舞台は夜，パーティに出かけようと浮かれている魔女である。一方，山田耕筰《燕》では，豊かな五月の明るい日射しへの賛美，回帰してきた燕の姿への感動が歌われている。

このようなことから，「ものをみる，比較する」際に「何がどのように異なるのか，それはなぜなのか。また異なる中にも何か共通するものはないのか（例えば，春の到来への思い）」ということが観点になると考える。そのような見方を通して，当該地域の気候，人々の季節感を垣間見ることができ，〈ものを見る眼・感じる眼〉を養う素地作りにもなりうると考える。

### 3 活動の手順—素材の活用—

授業の狙いは，気候や季節感を捉えた上で，各々の曲の表現の特徴を捉え，比較を通して双方の理解を深めることにある。手順は次の①～④である。

- ① **気候について知る**：ドイツ，日本の各々の冬から春への季節の移り変わりを捉え，気候学的特徴を捉えた上で両者を比較する。
- ② **文化の土台，背景をみる**：ドイツ，日本の各々の冬から春に移り変わる時期にみる伝統的な季節の行事，生活習慣や風習を知り，その意義を捉える。その上で，ドイツと日本を比較し，文化の土台になるもの，背景に目を向ける。
- ③ **歌にみる表現と季節感**：《もう一つの五月の歌（魔女の歌）》と《燕》の詩に歌われている内容を捉え，詩がどのようなメロディや伴奏で歌われるのかを知る。その上で②との関係の視点で作品をみて，冬から春へ移り変わる時期の人々の季節感を捉える。
- ④ **音楽表現と気候の関わり**：歌の表現にみる特徴と気候の特徴の接点を捉える。

## VI まとめ

ESDでの重要なベースの一つとして、「異質な他者」への理解がある。そこで本研究では、ドイツ付近の「春・5月」の気候と歌の表現に関する学際的テーマを例に、「異質な他者」への出会いを促す大学での授業開発へ向けた検討を行った。今回は実践や分析は行っていないが、「大学が独自に設定する科目」の「教科横断的思考・表現法」に該当する教育学部の専門科目の一つである「くらしと環境 A, B」(加藤内蔵進が主担当)での実践を念頭に置いて検討した。

まず、ドイツの「春・5月」の気候学的位置づけについて、加藤・加藤(2019)、加藤(2023)等をベースに、新たな解析結果も加えて再体系化するとともに、ドイツ歌曲に見られる「春・5月」の表現について、教材化の観点から分析・考察した。更に、ドイツと日本の歌曲について、季節の共通事象に注目して表現や気候背景の捉え方を吟味し、授業構築の検討・提案を行った。

「夏の入り口である春」という季節感でも捉えられるドイツ付近の5月は、冬の「極端な低温日」の頻出が終わって間もない時期であるとともに(加藤・加藤(2019)等も解説したように)、6・7月に約45%の出現頻度を占める平均気温15~20℃の日(いわばドイツの「夏」に準じる日)の頻度が、4月に比べて急増する時期であることが新たに示された。これは、気候学的な「平均状態」の把握の際にも、(平均や標準偏差などだけでなく)現象に即した変動状態の集計の工夫から、コンパクトに本質に迫る教材提供の可能性を例示している。

一方、「春・5月」の喜びに関連したドイツ歌曲の表現に関して、主和音を徹底的に回避する和声進行が醸し出す「春・5月」に恍惚する独特な季節感、魔女も5月の到来に浮き浮きする様子、夢の中の「春・5月」と現実の冬の厳しさとのコントラスト、「春・5月」という歌詞の重みに絡めた音楽表現など、曲を深く味わうことで異質な他者への出会いに繋げるポイントを曲毎に提示した。

更に、V章で提示した授業構想に関連して、音楽作品が生まれた地域の気候や文化の背景に目を向けることは、作品の表層にみえるものを深く知ることはもとより、なぜその表現なのかを考える機会となる。このことは、自分とは異なる他者の存在に気づき、それを認めることに繋がるきっかけとなり得よう。

今後は、本稿で提示した構想に基づく授業実践を行い、その結果を分析することにより、更に研究を進めたい。

## 謝辞

本研究は、科研費(基盤研究(C))「文化理解の新たな眼を育むための指導法開発:音楽の生成と気候の関りの学際的視点から」(H29~R01年度、加藤晴子、No. 17K04817)の補助も一部受けて進めた研究を、更に発展させたものである。

## 参考・引用文献

濱木達也・加藤内蔵進・大谷和男・加藤晴子・松本健吾:ドイツ付近の冬における日々の大きな気温変動に関する総観気候学的解析(冬の追い出しの行事

- 「ファスナハト」における季節感に関連して)。岡山大学地球科学研究報告, 25, 7-17, 2018。
- 畑中良輔・塚田佳男・黒沢弘光：日本名歌百選 詩の分析と解釈 I, 音楽之友社, 1998。
- 加藤晴子・加藤内藏進：ドイツにおける春の気候的位置づけと古典派, ロマン派歌曲にみられる春の表現について-教科をこえた学習に向けて-。岡山大学教育実践総合センター紀要, 5, 43-56, 2005。
- 加藤晴子・加藤内藏進：日本の春の季節進行と童謡・唱歌, 芸術歌曲にみられる春の表現-気象と音楽の総合的な学習の開発に向けて-。岡山大学教育実践総合センター紀要, 6, 39-54, 2006。
- 加藤晴子・加藤内藏進：春を歌ったドイツ民謡に見る人々の季節感-詩とその背景にある気候との関わりの視点から-。岐阜聖徳学園大学紀要, 50, 77-92, 2011。
- 加藤晴子・加藤内藏進：気候と音楽-日本やドイツの春と歌-。協同出版, 2014。
- 加藤晴子・加藤内藏進：気候と音楽-歌から広がる文化理解と ESD-。協同出版, 2019。
- 加藤内藏進：気候を軸とする学際的・探求的学びから発見する「異質な他者」の世界-ドイツと日本の季節サイクルや季節感の比較を例に一。『教育科学を考える』（小川容子・松多信尚・清田哲男編, 岡山大学出版会), 2023 (印刷中)。
- 加藤内藏進・赤木里香子・加藤晴子・埴和優一：冬を挟む日本の季節進行の非対称性と季節感に関する学際的授業（音楽や美術と連携した表現活動を通して）。環境制御, 36, 9-19, 2014。
- 加藤内藏進・加藤晴子・赤木里香子・大谷和男：ESD 的視点の育成を意識した気候と文化理解教育との連携-北欧の気候と季節感を例とする大学での授業実践の報告-。岡山大学教師教育開発センター紀要, 9, 183-198, 2019a。
- 加藤内藏進・加藤晴子・逸見学伸：日本の春の季節進行と季節感を切り口とする気象と音楽との連携（小学校での授業実践）。天気, 56, 203-216, 2009。
- 加藤内藏進・加藤晴子・松本健吾・大谷和男：ドイツ・北欧と日本の「夏」の気候や季節感の違いに注目して音楽と連携した大学での学際的 ESD 授業開発。岡山大学地球科学研究報告, 26, 25-36, 2019b。
- 加藤内藏進・加藤晴子・三宅昭二・森泰三：日本の気候環境と愛唱歌などにみる季節感に関する高校での学際的授業の開発（冬を挟む日本の季節進行の非対称性に注目して）。岡山大学地球科学研究報告, 24, 5-18, 2017a。
- 加藤内藏進・加藤晴子・大谷和男・濱木達也・埴和優一：冬の気候と季節感の違いに注目した大学での学際的授業の開発（ドイツと日本列島付近とを比較して）。岡山大学教師教育開発センター紀要, 7, 157-166, 2017b。
- 加藤内藏進・佐藤紗里・加藤晴子・赤木里香子・末石範子・森泰三・入江泉：多彩な季節感を育む日本の気候環境に関する学際的授業の取り組み（秋から冬への遷移期に注目して）。環境制御, 33, 20-34, 2011。

- 加藤悠爾・加藤内蔵進：気候変動に関する ESD 教師教育開発へ向けて：様々な時間スケールの地学現象の俯瞰。岡山大学地球科学研究報告, 27, 1-17, 2021。
- 小林亮：ユネスコの地球市民教育に関する心理学的分析—多元的アイデンティティの形成課題をめぐって—。玉川大学教育学部紀要, 2016 年号, 1-18, 2016。
- 中澤静男・田淵五十生：ESD で育てたい価値観と能力。奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, 23, 65-73, 2014。
- 日本ユネスコ国内委員会：持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引。日本ユネスコ国内委員会(文部科学省内), 2021(初版リーフレットの「持続発展教育について」(2008 刊行)も本稿では参照した)。
- 武田昭：『教会暦によるドイツ民謡』, 東洋出版, 全 363 頁, 1980。
- UNESCO (2017) Education for Sustainable Development Goals (Learning Objectives). UNESCO, 2017 (邦訳：藤井浩樹・柴川弘子・大安喜一(2020)による邦訳「持続可能な開発目標のための教育-学習目標-」(ユネスコ))。

---

Climate and songs of spring/May around Germany: An interdisciplinary approach on ESD teacher education leading to the understanding of heterogeneous others

KATO Kuranoshin \*1, NAGAOKA Isao \*1, KATO Haruko \*2, and OTANI Kazuo \*3

(Abstracts) An interdisciplinary approach toward development of the ESD lesson plan for teacher education leading to the understanding of heterogeneous others was made on a topic of climate and songs of spring/May around Germany. Climatological analysis together with reviewing the previous studies shows that May is the very month when the appearance frequency of the days with daily mean temperature nearly corresponding to the ordinary summer days increased rapidly from April, while the winter when the extremely low temperature days often appears had been terminated at the end of March. With considering such climatic backgrounds on spring/May, expressions of spring/May in the German lieder were analyzed. Finally, focusing on a common seasonal target, we compared expressions of a German lied and Japanese song, to develop the lesson plan as mentioned above.

Keywords: Climate and music, Climate and seasonal feeling in spring/May around Germany, Teacher education on ESD, Understanding of heterogeneous others

\*1 Faculty of Education, Okayama University

\*2 Faculty of Education, Gufu Shotoku Gakuen University (Former affiliation)

\*3 TV Setouchi Broadcasting Co., LTD.

---